

学部・大学院留学生の日本語学習における自己評価 の変容

—PAC 分析による事例的研究—

八若 壽美子

1. はじめに

日本語教育において 1980 年の後半から学習者の多様化が問題とされてきた。近年第二言語習得研究においては、多様性を学習者の属性や学習特性によるグループとして捉えるアプローチが学習者の個性の一面しか捉えずステレオタイプ化を進めるという批判から、多様性を学習者の個性として捉えることの重要性が指摘されている(津田塾大学言語文化研究所 2006)。

本研究は、学習者の個性に着目し、学部・大学院留学生 3 名を対象に PAC 分析(Personal Attitude Construct: 個人別態度構造分析)を用いて、学習環境の変化に伴う日本語学習の自己評価の変容を分析した縦断的研究である。

PAC 分析は内藤(1995)が開発した分析法で、「当該テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、本人によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、研究者による総合的解釈を通じて個人別にイメージ構造を分析する方法」(内藤 2004)である。

2. 調査の概要

2.1 調査の目的

本調査の目的は、どのような場面でどのように自己の日本語学習を評価しているかという観点から、授業を離れた後の日本語学習状況と、日本語学習の評価のイメージ構造の変容を明らかにすることである。

2.2 被調査者

◎被調査者 A、B

韓国人学部留学生。2003 年 10 月来日し、2003 年 10 月から 6 ヶ月間学部入学前予備教育プログラムで集中日本語研修(中級)を受けた後 2004 年 4 月から理系学部に進学した。2004 年度は教養科目の日本語を 2~3 科目履修した。レベルは上級である。

◎被調査者 C

インドネシア人大学院留学生。2004 年 4 月来日し、2004 年 4 月から 1 年間集中日本語研修(初級・中級)を受けた後 2005 年 4 月から理系学部大学院に進学した。

2.3 調査時期

第一回: 2005 年 3 月~4 月(A、B: 学部 1 年終了時、C: 集中日本語研修修了時)

第二回: 2006 年 2 月~3 月(A、B: 学部 2 年終了時、C: 大学院 1 年終了時)

いずれの被調査者もこの間日本語の授業を履修していない。

2.4 調査の手順

調査の手順の概略は以下のとおりである。

被調査者に刺激語として以下の文章を与え、教示した。

【刺激語】

自分自身の日本語学習について、あなたはどんなイメージを持っていますか。上達したと感じたり、よかったと感じたりするのはどんな場面ですか。また、不十分だと感じたり、大変だと感じたりするのはどんな場面ですか。

思い浮かんだ言葉やイメージを、思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。言葉でも短い文でもかまいません。

被調査者に思い浮かばなくなるまで自由連想させ、カードに記入させた。その後、それぞれのカードを被調査者が重要だと感じる順に並べかえさせ、順位を記入させた。

次に、カードに書かれた自由連想の言葉やイメージ同士が、直感的なイメージでどの程度似ているかその近さの程度を 7 段階尺度で評定させた。この

回答を基に各イメージ間の類似度距離行列を得、それをクラスター分析（ワード法）で処理し、デンドログラムを作成した。このデンドログラムに対する被調査者自身の解釈を面接法で求めた。最後に、それぞれの連想項目のイメージについて、プラスイメージの場合は(+)、マイナスイメージの場合は(-)、どちらもいえない場合は(0)の記号で記入させた。

3. 調査結果

PAC 分析では、被調査者本人の解釈をもとに調査者が総合的解釈を行うが、ここでは各調査の総合的解釈についての報告は省略し、被調査者の第二回調査時の学習状況と評価の変容を中心に報告する。

デンドログラムについては、紙面の関係上被調査者 C についてのみ示す。A、B のデンドログラム及び総合的解釈については第一回調査は八若・池田(2005)を、第二回調査は八若(印刷中)を参照されたい。C の第一回調査の総合的解釈は八若(2006)に詳しい。

3.1 被調査者 A

被調査者 A は、日常生活に不便を感じなくなった予備教育終了後から特に勉強していない。一年が経過した時点では、日本人との会話も気楽にできるようになり、授業でも困らなくなったため日本語を今後もあえて勉強する気はない。

評価のイメージ構造については、上半分に集中しているマイナスイメージの部分が第一回調査の「足りない」部分と、「慣れ」と表現されている下半分が第一回の「上達」を感じる項目とゆるやかに対応している。

「漢字」について韓国の新聞が読みやすくなった、「テレビがおもしろくなった」など、被調査者自信が上達を自覚していることが窺える。しかし、第二回では「慣れ」という表現が示すように上達の負の部分を感じている。

会話は気楽にできるようになった半面、以前は十分であったと思っていたことがそうではないという気づきもあった。

その一つは会話での微妙な話し方や言い回しの問題で、うまく人間関係が築けない原因の一つではないかと分析している。また、日本の考え方などが少し分かってはきたが、不十分であることも原因であると考えている。日本語よりもその背景としてある、日本の文化や考え方など日本そのものへと関心

が移行していることが窺える。

会話では、第一回では年寄り・子供の話が理解しにくいという点などに触れていたが、第二回では理解についての言及はなく自らの話し方の問題について多く指摘されている。

3.2 被調査者 B

被調査者 B は、生活や勉強面で不自由なことは少ないため特に日本語を勉強しておらず、今後も大学院進学を考えているので日本語より入試に必要な英語を勉強しなければならないとしている。

二回の調査を比較すると、漢字、レポート、テレビ、字幕映画など両調査で似通った項目が多く見られ、第一回調査の「会話」が第二回の「社会的」、「読み書き」が「学術的」、「聞き取り」が「趣味関連」と大まかには対応しているといえる。しかし、細部の構造やイメージにはいくつかの変容が窺える。

「学術的側面」の項目である漢字・レポートは第一回調査では難しい、大変だという評価であるが、第二回ではプラスのイメージに転じている。また、クラスターの解釈の課程で、漢字は今でも難しいが自分で勉強すれば解決できると説明している。第一回調査時に受験したいと述べていた「日本語能力試験」にも合格したことを報告している。

第一回では「聞き取り」の問題として多くの項目をとりあげていたが、第二回では「聞き取り」に関する項目では「なまり」のみがマイナスイメージである。

これに対して、第一回では不十分であるとしながらも「上達」を感じていた会話においては、今回自分が言ったことが相手にうまく伝わったかという不安感が最も大きな問題としてとりあげられている。困難とを感じる点が「理解」から発話を中心とした「運用」に移行していることが観察される。特に、他者との関係に気を使うようになり、会話に関する情意的な側面や「本音と建前」といった背景知識に関心が移っている。

B 自身は、全体としては上達していると思うが、間違いに寛容になり間違いが化石化するなど下手になった部分もあると指摘している。

3.3 被調査者 C

被調査者 C もまた、生活面では日本語で困ることはあまりなく、「日本事情」を 2005 年 10 月から履修したが、日本語は特に勉強していない。修士論文は英語で書くため、漢字は書く必要はない。し

かし、修士2年では英語による指導教員の論文指導が中心になり、日本語を使う機会が少なくなるため、時間があれば日本語補講など日本語の授業を受けたという希望を持っている。

自己評価については、第一回と第二回ではイメージ構造はかなり違うが、会話、作文、漢字、生活など取り上げられた項目は似通っている。

会話の学習に関する評価は第一回・第二回ともに高いが、第二回では第一回にはなかった相手の気持ちへの配慮や日本事情の理解など会話をとりまく要素が多く取り上げられ、関心の移行が窺える。

集中日本語研修終了時の第一回では漢字を中心とした読み書きの問題の重要度が高いのに対して、第二回は重要度が低くなっている。これは前述した漢字を書く必要がないという環境によるものだと考えられる。また、Cはお知らせなどもパターンがわかり、それほど困らなくなったと説明している。

全体としては、Cも上達を自覚しているといえるが、「忘れた漢字も多い」など日本語を意識的に勉強していないことによる日本語力の低下を感じている部分もあることを指摘している。

図 1-1 被調査者 C の第一回調査(集中日本語研修終了時)

【 クラスタ分析 基準：ワード法 】

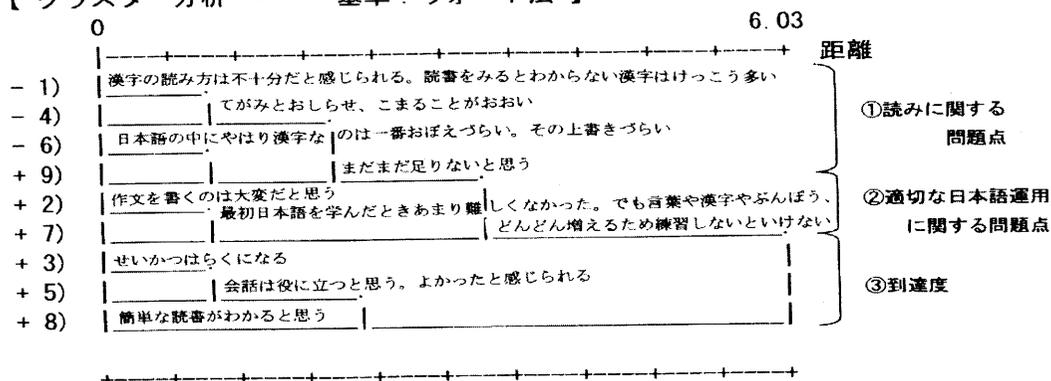
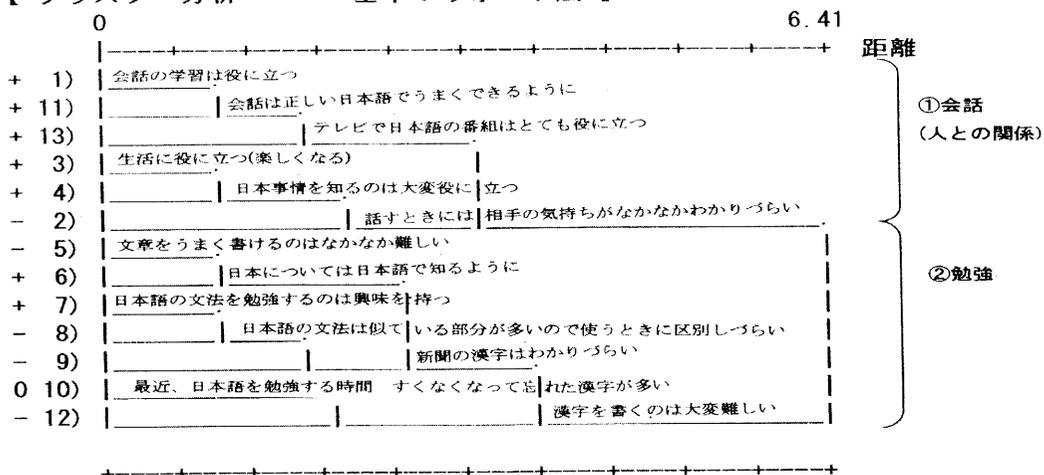


図 1-2 被調査者 C の第二回調査(大学院1年終了時)

【 クラスタ分析 基準：ワード法 】



4. まとめ

本研究では、学部・大学院留学生 3 名を対象にした二回の調査の比較から、学習環境の変化に伴う日本語学習の自己評価の変容を分析した。

自己の日本語学習に対する評価のイメージ構造は個別的であったが、学習状況には以下のような共通点があることがわかった。①生活面で困ることはなく、授業を離れてから特に日本語を勉強していない。②しかし、目標言語が使用される JSL 環境においては、上達は進み、学習者自身がそれを自覚している。

特に、学部留学生 2 名間の学習環境は似通っており、両者ともに自己の日本語の不十分な点も自覚しているが、今後積極的に解消に取り組む姿勢はみられない。これに対して日本語で論文を書く必要がなく、授業での日本語使用の機会も少ない大学院留学生は、状況が許せば授業で日本語を勉強したいという希望を持っていた。

自己評価のイメージ構造の変容にも次のような共通点がみられた。

- ① 二回の調査の日本語学習に対する評価のイメージ構造は 3 名ともにゆるやかに対応している。
- ② 対人関係に関心が向いている。
- ③ 日本語の背景にあるものへの理解の必要性をより強く感じるようになっていく。特に、日本語のレベルもより高く日本人との接触が多い学部留学生は、理解の問題から発話の際の微妙な言い回しや抑揚、情意面の問題に注意がいくようになっていく。
- ④ 「慣れ」や「間違いの化石化」「忘れる」など

意識的な学習をしていないことや上達に伴う「負」の部分を感じている。

3 名ともに日本語学習についての明確な計画はないが、今後どのような形で今感じている問題点を克服するのか、またどのように日本語学習に関する行動や意識が変容していくのか継続的に調査を続けていく予定である。

また、将来的には同様の属性を持つ学習者の事例数を増やし、当該集団における普遍的な特徴や問題点の解明をめざしたい。

さらに、コースやカリキュラムの改善という形では対応しきれない、日本語の授業を離れた学習者の個別的な状況や問題点にどのように対応し、支援していくも課題である。

参考文献

- 津田塾大学言語文化研究所 言語学習の個性研究グループ編(2006)『ことばを学ぶ一人ひとりを理解する 第二言語学習と個性』春風社
- 内藤哲雄(1995)『PAC 分析実施法入門: 「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
- 内藤哲雄(2004)『留学生の孤独感の個人別構造分析』平成 13 年度～平成 15 年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2) 研究成果報告書
- 八若壽美子・池田庸子(2005)「韓国人留学生の日本語学習における自己評価」『共生時代を生きる日本語教育—言語学博士上野田鶴子先生古希記念論文集—』凡人社 443-456
- 八若壽美子(2006)「インドネシア人留学生の日本語学習の自己評価—PAC 分析による事例的研究—」『茨城大学留学生センター紀要』第 4 号 13-22
- 八若壽美子(印刷中)「韓国人学部留学生の日本語学習における自己評価の変容」『茨城大学留学生センター紀要』第 5 号

はちわか すみこ／茨城大学 留学生センター

hachiwak@mx.ibaraki.ac.jp